

自己肯定感低め JK、許嫁お兄さんに
でろでろに甘やかされる

花室かんろ

注意書き

- この作品は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧を固く禁じます

- ハート喘ぎ、濁点喘ぎなどを含みます

- 本作品の倫理観は架空のものです

- 他者から強要された結婚の描写がありますので、苦手な方はご注意ください。現実でのそのような行為を推奨する意図はまったくございません

- 毒親描写がありますので、苦手な方はご注意ください

- 本作品内での女性の婚姻開始年齢は、十六歳です

自己肯定感低めJK、許嫁お兄さんにでろでろに甘やかされる

第一章 再会

「聞いているの？葉留子」

隣の母に名前を呼ばれてハツとする。あなたのことなのよ、というお小言に曖昧に頷き、正面の男に視線を戻す。

さつきから、この男を盗み見ることはかりに意識が行っていて、母と男の間で交わされる会話は右から左に流れていた。

目の前の男は、宮松要。葉留子の許嫁にして、いい所のお坊ちやま……なのだが、おっとりのんびりした性格上、家業を継ぐのは向いていないと、祖父から譲り受けたこの家で早くもほぼ隠居のような生活を送っ

ているらしい。家を継ぐのは弟がすればいいだろうとのことだ。

この四月から葉留子が通う高校はこの家から近く、父は勝手に同棲する形で話を進めてしまった。

ばっちりと目が合うと微笑まれ、葉留子は慌てて目を伏せる。

最後に会ったのは葉留子が小学校に上がるか上がらないかの頃だから、十年近く前になる。要は確か、今の葉留子と同じくらいの年齢だったと思う。その頃から優しく、面倒見がよかった要に、葉留子は遊んでくれる優しいお兄ちゃんとして懐いていた。

しかしこんなに成長した今だと、どうしても許嫁という関係を意識してしまう。どんな顔で、どんな距離感で接すればいいのだろう。目の前

の男は記憶の中と寸分違わず優しい声と、穏やかな目つきをしているが、流石に昔のように甘えには行けない。

緊張で借りてきた猫状態の葉留子を気遣ってか、要が口を開いた。

「同棲って言っても今すぐ結婚するわけじゃないし、そんなに気負わないで。学校から近いから居候始めたぐらいの気持ちでいいから」

「は、はいっ」

返事さえおぼつかない葉留子に、要も母も苦笑する。

「それじゃあ今日はこの辺で……。本当にありがとうございます。娘をよろしく願います」

母親につられて、葉留子も立ち上がる。

「いえいえ。こちらこそよろしくお願いします。引っ越しの日が近くなったらまた連絡してもらおう形でいいですか？」

話しながら、玄関まで見送られる。

「本当に突然すみません。お邪魔しました」

母親の隣で会釈とお辞儀を繰り返す。

要は最後、葉留子の方を見て言った。

「またね、葉留ちゃん」

「四月から大丈夫そう？」

帰り道に、母親が言葉を選んで尋ねてくる。葉留子の意見を聞かずに

勝手に同棲を決めた父に、母は賛成しきれていないのだ。

「うん……まあ……実家も電車で数駅だし」

葉留子だって父の勝手な決定に思うところはある。しかし今は、結婚するのだとずっと想い続けていた人のことばかりが、頭の中を占めていた。

第九章　ご褒美

季節は変わって、冬。

一時期は怪我で腫れていた手もとつくに治り、生活も仕事も支障なくこなせるようになっていた。

そろそろ仕事を一時中断し、夕食の準備に取り掛かろうか、と要は思った。

このくらいの時間からリビングを温めておけば、葉留子が帰ってきた時に寒い思いをさせなくて済む。

そう考えていたのに、要が立ち上がるよりも早く、玄関が開く音がした。

「ただいまです！」

葉留子の声と、ぱたぱたとした足音が要のいる書斎に近づいてくる。いつもより早い帰宅と軽い足取りに、要は首を傾げる。

「要さん！ただいまです！」

扉を開けて入ってきた葉留子は、声から想像できた通りにご機嫌だった。頬も紅潮しているが、それは外が寒かったからかもしれない。

「おかえり。今日は早かったね。何かあったの？」

ずずいっと、葉留子から紙が差し出された。

葉留子は要の問いには答えず、文机を挟んで要と向き合う形で、畳にちょこんと腰を下ろした。

要は葉留子が差し出した紙を受け取った。以前受けていた模試の結果だ。教科ごとの点数や総合点や順位が載っている。

冬の外気で冷やされた体が温まってきたのか、葉留子はとろりと溶けたように背中をくったりさせていた。

要自身がこうしたものと縁があったのは遠い昔のことだ。だから要の時代とは少しばかり様式が違っている。

それでも、良い結果だということはわかった。

これを見せたくて、いつもより急いで帰ってきたのか、と合点があった。

「へえ。葉留ちゃん、頑張ったんだね」

要は顔を上げて葉留子を見た。褒められて嬉しいのか、気恥ずかしいのか、葉留子は身をすくめてクスクスと笑っていた。いたずらっ子のような愛らしい仕草に要は目を細めた。

「ご褒美しなくっちゃね」

明日は、ケーキでも買ってこようか。

勉強を頑張る葉留子の姿勢は素直に立派なものだと思う。

別に葉留子に良い大学に行って欲しいだとかはないが、要は葉留子の頑張りの結果をはっきりとわかる形で確認できて、自分のことのように嬉しかった。

娘を甘やかしてしまう父親はこんな気持ちなのだろうか。いや、こ

れは無闇に甘やかしているんじゃない、頑張ったご褒美なのだから甘やかすのとは違うはず、断じて親バカではない……などと要は親心に浸った。

「え？え……？」

「ん？」

戸惑いのような声を聞いて我に返ると、葉留子は顔を真っ赤にしていた。

正座の腰が引けて、まるで要と距離を取っているようだ。

「え？葉留ちゃん？どうしたの？」

自分は何か、そんなにまずいことでも言ったのだろうかと言を振り

返る。葉留子の頑張りを褒めて、労いとしてご褒美を提案しただけだ。

「だ、だって、要さん、そんな、ご褒美って……」

「あ」

葉留子の震える声を聞いて思い当たった。そういえば、夜の営みではご褒美と称して耳責めを行っていたのだ。

「ケーキでも買ってこようかと思ってたんだけど……。そっか。葉留ちゃんはそういうご褒美をご所望なんだ」

期待に揺れる葉留子の瞳が、要の中で熱を疼かせる。

要が立ち上がり、葉留子のそばに行くまで、逃げる時間は充分にあ

るのに、震えたまま動かないのが期待の何よりもの証拠だ。

「あっ……いや……っ！」

葉留子の隣に座り、膝に乗せようとする。葉留子は、口では嫌と言いつつも、要にしなだれかかって、身を預けてきた。

要は胡座あぐらの上に、葉留子を横向きに座らせ、腕の中にしっかりと閉じ込めた。

まだひんやりとしていて氷のような葉留子の髪を避け、現れた小さくて可愛らしい耳に唇を寄せる。

ぴちゃ……♡ちゅ……♡

わざとらしく、いやらしい音を立てて、今から耳責めをするのだと

葉留子に実感させる。

「あう……♡♡」

他のところは、触らない。

葉留子が耳への刺激に集中できるように、耳責めの最中は他所への愛撫はしないようにしていた。頭や頬を軽く撫でることはあるが、胸や秘部などの性感帯は徹底的に避け、ひたすらに耳だけを食む。

「あゝッ♡♡」

耳朵を甘噛みすると葉留子が身悶える。

葉留子はすっかり蕩けて力も抜けきっているのに、体は快感に翻弄されてこわばっている。そんな葉留子の体が滑り落ちてしまわないよ

うに、要はしっかりと支えた。

「葉留ちゃんは頑張り屋さんだね。お利口さん」

つつ、と指で耳をなぞりながら低い声で囁く。腕の中の葉留子は
びくびくと震え、要にしがみついた。

ちゅっ♡じゅるっ♡

「あ……♡あ、あ……♡」

葉留子の声が、追い詰められたものになってきた。もうすぐだ、と
わかった要は葉留子の手を握った。

「気持ちよくなれてえらいね。いい子。好きなタイミングでイって
いからね」

「ん……♡」

じゆるッじゆるッ♡ちゅば……っ♡♡

「あ、あ♡やあああんっ♡♡!!」

要の手をぎゅうっと握って、葉留子は体を跳ねさせた。

耳を解放し、蕩けた葉留子の様子を窺う。

「はーっ……はーっ……♡♡」

ぐったりしていて、声もまともに出せないほどの余韻の中を漂っているようだった。なのに、潤んだ瞳で要を見上げてきた。

「もっと」とねだられている気がした。

そうでなくとも、こんなところで終わってやれない。要の雄は、す

っ
かり目を覚ましていた。

「続き、していい？」

太ももに手を置いて尋ねると、葉留子は力なく頷いた。要は太ももを撫で上げる。

「あ……っ♡ん……」

スカートの中に手を入れ、布越しに葉留子の中心に触れると、そこはしっとりと湿っていた。

ショーツの隙間から指を入れて、トロトロの秘豆を探り当てる。

ぬちっ♡ぬちっ♡くちゅ♡

「あっあっあっ♡やぁ♡音やだっ♡」